

私にとって天地がひっくり返るような「癌患者」になってからようやく7年が過ぎ、いやもう七年も経ってしまった感じがします。闘病中のみなさんに励ましさえも気恥かしくて言えませんが、病気になるなければ経験できなかった事をお伝えできればと思いペンを執りました。

私は平成16年正月明けに突然「卵巣癌」と診断されました。三日後に女性ならではの臓器をすべて取り除く緊急手術を受けました。49歳の時です。2歳下の妹は38歳の時に小学校入学前の一人息子を残し、同じ「卵巣癌」で亡くなっています。私は以前フルマラソン、登山と幾度もこなしてきた体力があるから、悪い患部を取ってもらったらすっきりするだろう程度に軽く考えていました。しかし手術を終えてベッドに寝ている時間が長くなるにつれて「死」への恐怖が頭から離れなくなり泣き顔をあわててそむけなければならない日々が続きました。8クールも化学療法を受け無菌室に入るような白血球減少も治まった2年8ヶ月後に、今度は腸への転移を告げられました。

平成18年10月に京都の大学病院に入院。婦人科病棟で同室だったKさんは私と同じ年。低学年の宿題のような自分の名前や単語のプリントを、麻痺のある手で毎日書いておられました。「以前は一日中車を運転しながら男並みに働いていた矢先に病に倒れ、癌手術前日に脳卒中まで併発し30日も意識が戻らなかったんだ。」と、ご主人が話して下さいました。意識が戻った時には手足と言語の麻痺が残り、そのリハビリと同時に放射線治療も受けておられました。ようやく少し歩けるようになった足で、私を風呂場まで案内して下さい、私もKさんが話しにくい行を「ラア」と一緒に発声練習するような仲になっていました。

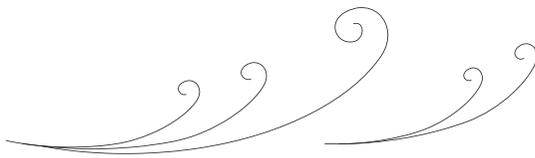
彦根出身のMさんとは20歳以上も離れていましたが、郷里の話や患者の本心を「私の母より何でも喋れるわ。」と散歩途中の自販機前で抹茶ミルクを飲みながらよく話し込みました。そのKさんご夫婦とMさんは、私の手術日に「無事終了して帰ってくるのを、ずっと待っていて下さったんだよ。」と後で母から聞かされました。

Sさんと初めて出会ったのは化学治療前日。「どうせ明日から食べられんのやから。」と二人で病院食をすっぽかしてレストランへ直行。「抗癌剤で再起出来ないくらいやられてしまうのはいや。最後まで自分の意思で動きたいよね！」と、回りを気にせず夢中で話し込みました。その時食べた冷やし中華の美味しかったこと。

次の日は隣同士のベッドで「大丈夫？」と声を掛け合いながら治療を受けたので、いつもより早く楽に済んでしまったように思いました。彼女とは退院してからも家族ぐるみで悩みを話し合う関係が続きました。

私は医者から「完治はしないだろう」と言われています。今でも検査前日は神棚に手を合わせ「どうか無事に帰ってこられますように！」と祈ります。いつ再発転移するかもしれないという不安は、ずっと頭から離れません。

しかし、この地球上でたった一回きりの「自分」を、死ぬその時まで生きなければならぬと思っています。まだいっぱいしたい事やしなければならない事、私にも出来る事があると思えるからです。私の中には、最後まで生きぬかれたKさん Mさん Sさん、そして幼い息子のためなら命さえ惜しまなかった妹が今も生き続けて、時として励ましてくれています。そういう私も自分が生きていることで、誰かを励ませることができたならば、それは嬉しい限りです。



短歌「一步踏み出す」

穂積孝子



梅檀の花咲く季に癌告知受けし母さんわたくしもまた  
夫や娘でなくてよかった癌告知すんなり胸に受け止めている  
かわいげのない女やも癌告知受くるも涙一滴出ず  
少年のようにスッパリ髪を切り癌と対峙の一步踏み出す  
愛犬にミルクやりつつ言い聞かす入院のこと留守番のこと  
リビングにはほたるぶくろと紫陽花のむらさき満たす入院の朝  
ペタペタに筋肉落ちし脹脛ウオーキングの友を羨しむ  
脹脛(ふくらはぎ)  
点滴のポールを杖に歩みゆく長き病廊遍路のように